

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2024 年 6 月 20 日

No.148



およそ 100 年前のケヤキ並木（1919 年刊行『東京府史蹟』より）

もくじ

- 1-2 国天然記念物指定 100 年 馬場大門のケヤキ並木
その①…100 年前のケヤキ並木
- 3 最近の発掘調査
武蔵府中熊野神社古墳で新たに土取り穴を発見？
- 4-5 NOTE
ある史跡標柱の履歴
- 6 展示会案内 市制施行 70 周年記念
特別展 鳥満員！ 昆虫レストラン
- 7 展示会案内
復元建物展示 カイコとくらしのむかしの農家
- 8 series 祈願と御利益
①奉納は御利益への近道？
- 9 令和 5 年度寄贈・寄託資料一覧
利用状況 新刊案内
- 10 近代プラネタリウム誕生 100 周年！
プラネタリウムについて知ろう！
⑤近代プラネタリウムより前の「プラネタリウム」

国天然記念物指定 100 年 馬場大門のケヤキ並木

おおくにたまじんじや
大國魂神社の参道であるケヤキ並木は、1924 年（大正 13）に国の天然記念物に指定されました。今年
はちょうど 100 周年です。この機会に、博物館では
12 月から 1 月にかけて、企画展の開催を予定して
います。本誌でもケヤキ並木にまつわる話題を 4 回
シリーズでお届けします。

その①…100 年前のケヤキ並木

初回は、天然記念物に指定された頃のケヤキ並木です。上の写真は、指定される 5 年前に刊行された『東京府史蹟』という本に掲載されたものです。今は失われた巨木の向こうに、ケヤキの樹列が見えます。



国天然記念物指定 100 年

馬場大門のケヤキ並木

その①…100 年前のケヤキ並木

表紙の写真で眼前に迫るように写る巨木は、並木東側の南端にあった老木です。これを筆頭に、一直線に延びる並木の姿はまさに圧巻です。

ケヤキ並木を写した古写真はそれなりにありますが、当時の東京府の主要な史跡や名勝等を紹介した『東京府史蹟』に掲載されているだけあって、印象的な写真といえます。同書の刊行は1919年（大正8）6月。写真は天然記念物に指定される数年前の撮影なのでしょう。今回は、この写真から100年ほど前の並木の様子を読み解いてみたいと思います。

まずは、この老木から。この老木は長く横綱の位置を占め、大國魂神社の御神木でもありました。ケヤキ並木南端の、当時の甲州街道（旧甲州街道）あたりから北を見た風景だと特定できるのも、この老木の存在があってこそです。

老木は天然記念物指定より前の1917年9月の台風で、幹を折られながらも生き続け、1919年の時点で周囲9.9m程もあったと記録されています。しかし、1951年（昭和26）のルース台風で残っていた幹と枝がすべて折れて、遂に枯死してしまいました。ちなみに、1981年には伐採されて、切株が標本として残され、これは当館の常設展示室でみることができます。

画面の右上を斜めに横切る丸太は、折れかかった枝の支え木のようなようです。この状況から、撮影は台風による折損後、1919年6月までの間に絞り込むことができます。

老木の前の立札は、写真から全文を読み取ることとはできませんが、ほぼ同じ頃に発行された絵葉書に明瞭に写っていて、この老木と並木の由緒が書かれていたことが判明します。その末尾には「大正五年六月 社務所」とあって、天然記念物指定よりも前から、神社がこの老木や並木の由緒を宣伝していたこともわかります。

次に、並木全体に目を向けてみましょう。老木に限らず、並木は全て葉を落としています。季節は冬です。現在とは異なり、周囲に高い建物のないことが、ケヤキの背の高さを際立たせているようです。

御神木はあまりにも大きいためか、根元の間際に杭を打ち有刺鉄線で、その先の並木は柵で囲っています。根元を傷めないようにという配慮が感じられ、保護の精神が窺えます。一方、並木の根元には、数本の電信柱も見えます。根を痛めてしまうのではないかと心配するところですが、府中に電灯が灯ったのは1913年でしたから、電信柱の存在そのものが時代を反映していることも見逃せません。

左右の並木の中央の、参道である大門は、並木の外側に比べるといくらか盛り上がったように見えます。本来は並木の樹列のところが土手になっていたはずなのですが、すでにこの頃には失われていたのでしょう。もっとも、ケヤキ並木の全長は600mを超えます。並木の先の様子までは、この写真からはわかりません。

大門の先を見ると、どてら（褌袍）らしきものを着た子供、そして中央には荷車を曳く馬の姿が見えます。その左には、幌付きの乗り物に数人の人影も見えます。

府中には1916年に京王電気軌道（現・京王線）が開通し、ケヤキ並木の東側に府中駅が開業していましたが、それよりも前の1889年（明治22）に、東京と八王子を結ぶ甲武鉄道（現・JR中央線）が開通していました。府中の最寄り国分寺駅で、この頃は乗合馬車が行き来していたのです。ケヤキ並木をまっすぐ北上すると国分寺駅でした。

並木の左側には大門よりも低い通路を挟んで、家並が見えます。二階屋もありますが多くは平屋で、並木に向けて庇を出しています。現在のケヤキ並木の景色や往来と比べると、まさに100年という時の隔たりを強く感じるころです。しかし、明治前期の地籍図を見ると、このあたりには畑が広がっていて、人家はありません。甲武鉄道の開通や府中駅の開業が、ケヤキ並木にまで賑わいの空間を広げ始めていたのです。天然記念物の指定は、そうした時代の変革期の出来事でした。（深澤靖幸）

最近の発掘調査

武蔵府中熊野神社古墳で 新たに土取り穴を発見？

西府町三丁目

府中市ふるさと文化財課

湯瀬

禎彦



東側土取り穴（西から）

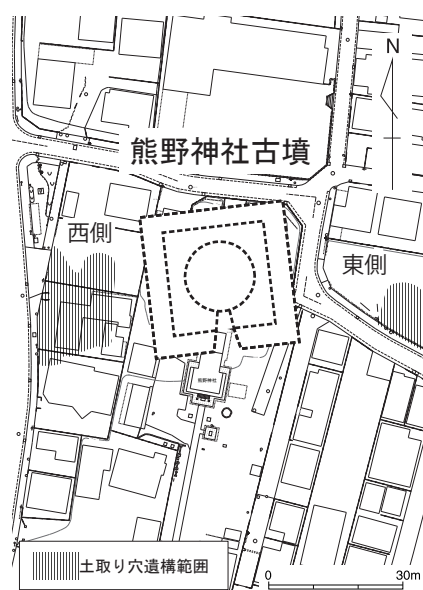
西府町の甲州街道北側に鎮座する熊野神社の境内には、国史跡の武蔵府中熊野神社古墳があります。この古墳は上円下方墳と呼ばれる大変珍しい形で、7世紀中頃（飛鳥時代）の築造と考えられています。

この古墳の西側の発掘調査では、東西15 m以上、南北25 m以上、最大深さ2.5 mの規模となる不整形の掘り込みが確認されています。この掘り込みは古墳のすぐ近くにあり、巨大なことから、古墳の墳丘の構築に使う土を採取した穴の可能性が考えられています。

実は、これと似た掘り込みは、すでに古墳の東側でも確認されていましたが、これまでその実態は分かりませんでした。ところが、近頃その周辺の発掘調査で、西側の土取り穴と同様の形態を呈した掘り込みが見つかりました。その結果、以前に発見されていたものも含め、東側の掘り込みは東西11 m以上、南北13 m以上、深さ1.2 m以上に及ぶことが明らかになり、こちらも土取り穴の可能性が出てきました。

このように熊野神社古墳の東側と西側では、同じような巨大な掘り込みが確認され、ともに墳丘築造に伴う土取り穴と考えられるのですが、大きな謎があります。西側の掘り込みは最も深い部分から9世紀の須恵器が出土しています。つまり、この掘り込みが熊野神社古墳の築造に伴う土取り穴であるなら、7世紀中頃に古墳が築造された後、少なくとも150年ほどの間は巨大な穴が開いたままになっていたことになるのです（なお、新たに見つかった東側の掘り込みは最深部まで確認できていません）。

長期にわたってこのような特異な景観が古墳の近くで続いていたとすると、それはどのような意味をもつのか、またそもそもこの掘り込みを古墳築造のための土取り穴とみてよいのかなど、解明すべき課題は多いといえるでしょう。



土取り穴位置図



旧田中家住宅前に立つ「明治天皇府中行在所」の史跡標識

▼ 昭和 10 年建立の石造標識

郷土の森博物館の園内に移築・復元された旧田中家住宅の表門の前には、高さ 1m85cm の石造の角柱形の標識が立っています。正面には大きく「明治天皇府中行在所」、正面からみて右の側面には「昭和十年五月建設」と刻まれています。

今回は、この標識が辿った歴史を話題にしたいと思います。

▼ 府中行在所と史跡指定

さて、標識の左側面にはなんと刻まれていたのでしょうか。2 行書きで文字があったことは確かなのですが、全ての文字が打ち欠かれています。それでも、右の行には「史蹟名勝天然紀念物保存法」と刻まれていたであろうことが、辛うじてわかります。

「史蹟名勝天然紀念物保存法」の名があることから、歴史好きの方なら、この標識が史跡や名勝に建てられているものと同じだと見当が付くことでしょう。そうです、この標識は、現在の文化財保護法の前身でもある、史蹟名勝天然紀念物保存法に基づいて指定された史跡の標識なのです。

府中市内では、天然記念物指定の翌 1925 年（大正 14）に建立された〈天然記念物 馬場大門樺並木〉の標識が今も現地にあります。

明治になって、御所を京都から東京に移した明治天皇は、各地を巡幸、行幸すること度々でした。行幸は天皇が居所から外出することで、目的地が複数ある場合は特に巡幸といいます。そして、この巡幸、行幸の際に、昼食をとったり宿泊したりした施設を行在所というのです。行在所は「あんざいしょ」と読みます。

博物館にある旧田中家住宅は、大國魂神社の北東、旧甲州街道に南面して店を構えた商家を移築・復元したものです。旧田中家住宅については、本誌 144 号や 141 号にも概要を紹介していますが、屋号を「柏屋」といい、荒物・酒・反物を扱う商家で、旅籠を営んだこともある、府中宿の老店でした。

そして 1880 年（明治 13）、明治天皇が山梨・三重・京都を巡行するに際して、行在所となったのが田中家でした。その後も、連光寺村（現在の多摩市）での兎狩りや、多摩川での鮎魚の見学を目的とした行幸が行われるたびに行在所と

なっていて、それは先の巡幸を合わせて計6回に及びました。奥行き約50mの細長い敷地いっばいに建てられた建物のうち、天皇の御座所には最も奥まった奥座敷部分の一棟があてられました。

今日の感覚とはかけ離れていますが、昭和になっただけだとすると、全国の行在所をはじめとする明治天皇ゆかりの地が〈聖蹟〉として崇められるようになり、史跡指定の対象となっていました。最初は1933年（昭和8）で、この時は全国で86か所が一斉に史跡に指定されています。田中家が府中行在所として指定されたのもこの時でした。多摩地域では、もともと隅田川のほとりにあった三条美美の別邸の対鷗荘が、現在の多摩市連光寺に移築されていて、これもこの時に指定されています。また翌年には、同じ連光寺の富澤家、日野市本町の佐藤家、八王子市の小仏峠が小休所などとして加わっています。

▼ 府中行在所の標識と史跡指定の解除

さて、府中行在所の史跡標識は「昭和十年」と刻まれていますから、指定から2年後の建立です。古い写真を見ると、この標識とともに説明板もあったことがわかります。当時の府中町では、1940年の紀元二千六百年記念事業として、行在所の建物の改修に着手し、翌年には土地と建物を購入して保存措置を講じています。

しかしながら、1945年、敗戦を迎えると、連合国軍総司令官総司令部（GHQ）の指示により、聖蹟として指定された史跡のすべてが解除されます。他所の標識も参考にすれば、標識の左側面には当初「史蹟名勝天然紀念物保存法二依リノ史蹟トシテ昭和八年十一月文部大臣指定」と刻まれていたはずで、指定解除を受けて法的根拠を示した文言をピンポイントで削り取ったのだと推測できます。

なお、府中行在所は、町有財産となっていたため、図書室となったり、市制施行後には市会議所として利用されたりしたこともありましたが、1960年前後に段階的に取り壊され、御座所となった奥座敷部分を残すのみとなっていました。そして、最後まで残った御座所は、郷土の森博物館に移築するために1982年に解体されています。

この間、標識がどのように扱われていたのか

は詳らかではありませんが、周辺の再開発事業が進むなかで博物館の建設予定地に移され、御座所の建築部材とともに保管されていました。

各地の標識も、指定解除により撤去されることはなく、対鷗荘、富澤家、佐藤家、小仏峠に建てられていた標識は完全な姿で残されています。しかし、他所で文言を除去された標識は確認されていません。敗戦後、府中は聖蹟に対して過剰に反応してしまったのかもしれません。

▼ 旧田中家住宅と史跡標識の意義

田中家を郷土の森博物館に移築・復元したのは、府中宿の本店だったことのみならず、行在所になった歴史も評価されてのことでした。

しかし、指定解除になったことも紛れもない事実で、戦後の歴史を語るうえで見落とせません。田中家を移築・復元した意義は、ここにもあるのだと思います。そして史跡標識は、その事実を伝える物証となります。とりわけ、指定理由を示した文言が消されていることに、ほかの標識にはない大きな特質があります。あまたある聖蹟の史跡標柱が辿った歴史のひとつにすぎませんが、文言を削り取ったことによって、指定解除という出来事が標柱に刻み込まれたのだといえます。ここに、この標識の歴史的な意義があるのだと思います。

※史蹟は史跡に統一しましたが、固有名詞に限り史蹟を用いました。また聖蹟は歴史用語としてそのまま用いました。



史跡標識の
削り取られた銘文

市制施行 70 周年記念 特別展

超満員！ 鳥 昆虫レストラン



8/10 (土) ~ 9/29 (日)

会場：本館 1 階 特別展示室

食物連鎖という言葉があります。自然界の中で、生きもの同士が食う（捕食）・食われる（被食）の関係で繋がっていることを示す表現です。すべての動物の食物は、植物が光合成で生み出す有機物をその源としています。植物ある所には草食動物が集まり、草食動物を狙う肉食動物がこれに加わります。そして肉食動物の死骸はバクテリアが分解して土に戻され、そこに再び植物が生長します。このサイクルこそ、生きもの世界の常であり、安定した連鎖の保たれる場所ほど良好な生態系が維持されることになるのです。

食物連鎖の階層を具体的に表すと、植物を草食性の昆虫が食べ、草食性の昆虫を肉食性の昆虫や小動物が食べます。さらにこれらをワシやタカなどの猛禽類、キツネやタヌキなどの哺乳類が狙います。それぞれの階層に属する生きものの量を下位から積み上げると三角形となり、これを生態ピラミッドと呼びます。下位ほど生きものの数は多く、上位になるほど減っていく形です。つまりは上位を占める大型鳥獣が存在する地域ほど、エサ

となる下位の生きものの質と量が豊かで、大きく形の良い三角形を描き出すのです。生態ピラミッドの形を維持すれば、その場所の生態系が安定します。ある米国の科学者がヒトを頂点として広がる三角形を数量的に語っています。「ひとりの人間が 1 年間生きるためには、300 匹のマスが必要。そのマスには 9 万匹のカエルが必要で、そのカエルには 2,700 万匹のバッタが必要で、そのバッタは 1,000 トンの草を食べなくては生きていけない」と。

さて、そんな生態系で見られる捕食者と被食者の代表は、何と言っても野鳥と昆虫でしょう。ピラミッドの中核を占める連鎖の主役であり、生息数・種類数ともに豊富なため観察機会も多いと思います。府中は多摩川や浅間山など緑豊かな環境を有し、そこには多くの昆虫と野鳥が混在します。それぞれに活動目的があり、個々の生活を維持することに努めているわけですが、何よりもやはり食べることが重要です。彼らは、エサが捕れる場所を基本に生息エリアを選択しているのです。

今まで行ってきた展示会では、各環境に生息する昆虫や野鳥を個々に紹介してきました。今回は両者の間に展開する食物連鎖の関係を交えながら、お互いの繋がりが理解できるよう構成しています。たとえば河原に飛ぶトンボが空中でツバメに捕獲される様子や、雑木林に飛来したカラスが好物のカブトムシを狙う様子を通じて、昆虫・野鳥ともに単独で存在するのではなく、生態系という社会の中で複雑に絡み合っている姿をイメージしてもらえたらと思います。（中村武史）



虫を捕獲したホオアカ（撮影：影山 昇）

カイコとくらしたむかしの農家

6/1 (土) ~ 2025/3/30 (日)

会場：園内 旧河内家住宅

日本の開国以降、海外への輸出品として生糸やそれで織った絹織物の需要が高まりました。それに伴い、生糸の原料であるカイコのマユが高値で取引されるようになります。

明治半ば頃になると、一定の温湿度を保てば卵がふ化する時期をコントロールできるという知識が農家の間で広まります。そして、年に3回程度自宅で養蚕を行うようになります。

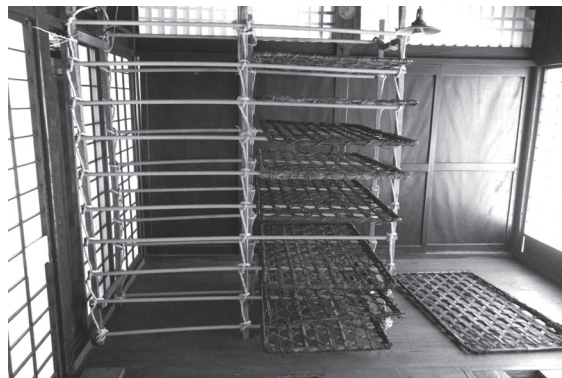
それには室内の温湿度を調整する工夫が必要です。そのために、自宅をリフォームする農家が現れました。当館園内に移築・復元された旧河内家住宅も明治末期にリフォームされています。

ここで、旧河内家住宅を事例に、温度を一定に保つ工夫を紹介しましょう。大戸口をくぐると、すぐ右側にザシキがあります。そこでまず目につくのが、床の真ん中にある2つの炉でしょう。この炉で火を焚き、室内を温かくしました。天井に視線をうつすと、一定間隔で板が張られています。この簀子天井は、温かさを保つとともに、炉から出る煙を抜きやすくするために作られました。

次に障子や板戸の上を見て下さい。そこにも小さな障子があります。それは欄間障子というもので、取り外しができるようになっています。室内が温かくなりすぎたら、ここを外して空気



旧河内家住宅の床に設けられた炉



再現した蚕棚の一部（左）とエビラ（右下）

を入れ替え、室温を一定に保ちました。

今度は外に出て屋根にご注目。屋根の上にさらに小さな屋根があります。これは室内の煙がより抜けやすいようにした煙出しという設備です。

このようなリフォームをするには、かなりの費用が必要です。それでも河内家を含め、多くの農家が行ったということは、養蚕がそれを上回る収入を彼らにもたらしたからなのでしょう。

こうして温湿度管理ができる空間でカイコを育てるようになりますが、そうした工夫が設けられたスペースは限られています。このため、空間を効率よく使える蚕棚という棚を用いました。部屋には炉があるので、蚕棚は炉を挟むように設置しました。

カイコは竹で編んだ平たいエビラ（蚕籠）で育てました。ふだんはエビラの上に簀を敷いてカイコと桑を乗せ、縦1列で10段もしくは12段ある蚕棚に入れておきます。蚕棚は部屋に複数作るので、大量のエビラが必要でした。桑の葉を与える時、食べ残しやフンを掃除する時は1枚ずつ引き出し、給桑台という台に置いて作業します。また、カイコが大きくなると1日に4回桑の葉を与えたというので、エサやり・掃除のために何度もエビラを出し入れしていたようです。

本展示は、カイコ用のリフォームをした旧河内家住宅を会場にしています。土間から再現した蚕棚をみると、なかなかの迫力があります。各所に施された工夫とあわせてご覧ください。（荒一能）



①奉納は御利益への近道？

神仏に願えば叶うなら、あなたは何を願うでしょうか？一般的にその行為は「祈願」と呼ばれ、未来の幸運をお願いすることが多いようです。

神仏に祈願した証を形で残すための代表的な行為のひとつに「奉納」があります。よく知られている奉納物は絵馬でしょう。寺社に願い事が書かれた小さな絵馬がたくさん掛けられているのを見ることは多いです。

祈願の結果、得られるとされる幸運は「御利益」と呼ばれます。府中市内ではないですが、縁を切りたい人の名前を絵馬に書いて奉納すれば叶うという、その人にとっては幸運(?)な御利益を得られると評判の寺社まであり、祈願の種類は様々だと感じます。

府中市内にも、御利益のために絵馬やモノを奉納することで知られている寺社がいくつかあります。ここではその中から、大國魂神社境内にある宮乃咩神社の例を紹介しましょう。

宮乃咩神社は芸能や安産の神様として知られていて、古くから安産を祈願する女性を描いた絵馬が奉納されます。その絵馬のほかに、底が抜けた柄杓も大量に奉納されています。底が抜けた柄杓でいくら水を汲んでもスッと抜けてしまうことから、お産もスッと抜けるようにと広まったと言われています。

府中ではここだけですが、安産のために底抜け柄杓を奉納するのは、近所なら八王子市の子安神社、遠くだと高知県高知市の種間寺など、全国各



安産祈願もしくはお礼参りで宮乃咩神社に奉納された絵馬（2024年撮影、以下同）



奉納された底抜け柄杓



安産のお礼参りで奉納された丸い絵馬

地にあります。祈願の際に底抜け柄杓を奉納し、安産のお礼に底抜け柄杓をもう一つ奉納するところもあります。

府中の言い伝えでは「安産を祈願して宮乃咩神社に絵馬を奉納し、安産のお礼に柄杓の底に穴をあけて底抜け柄杓にして奉納する」となっていました。しかし、令和になってから新たな奉納方法が登場しました。まず祈願の際、柄に「安産祈願」と記された柄杓が準備され、その底を抜いて奉納します。簡単に抜くことができる柄杓の底には、「安産お礼参り」と書いてあり、円形の絵馬として使用できます。後日安産のお礼参りで、祈願の際持ち帰ったその絵馬を奉納するのです。底抜け柄杓とその底がセットになったことにより、奉納の順序が逆になっただけでなく「安産祈願で底抜け柄杓を奉納し、御利益（安産）があったら柄杓の底を奉納することで、最終的に柄杓全体が奉納される」という安産祈願物語が新たに誕生したようです。

なお、数は少なくなりましたが、安産を祈願する女性を描い

た絵馬も現役で、祈願、お礼参りのいずれかの際に奉納されています。柄杓とあわせて奉納する人もいます。

人々は自力では予測困難な未来に対し安心を求めるため祈願し、御利益への近道と信じて奉納をするのでしょう。地域の差や時代の変化はありますが、こうした思いは、科学万能とされがちな現在でも息づいているのです。（佐藤智敬）

令和5年度
寄贈・寄託資料一覧

No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	内藤 治	寛永通宝	歴史	一括	寄贈
2	鹿島 有子	白糸台鹿島家文書	歴史	一括	寄贈
3	内藤 蓉子	本宿小野宮 内藤治左衛門家文書Ⅱ	歴史	一式	寄託
4	山本 克彦	電話機、計算機等	民俗	17点	寄贈
5	鹿島 有子	ひな人形、米びつ等	民俗	3点	寄贈
6	土屋 栄一	名入り半纏	民俗	3点	寄贈
7	内藤 蓉子	旭天満宮掛軸	民俗	一式	寄託
8	中村 純子	阿弥陀一尊種子板碑等	考古	3点	寄贈
9	中山 真治	小中学校文集	教育	12点	寄贈
10	高野 淳	精勤証等	教育	6点	寄贈

資料をご寄贈ください！

博物館では、府中に関わる資料を集めています。
博物館に寄贈しても良いという方がいらっしゃいましたら、ご一報ください。

昭和40年代以前の家電製品／府中にかかわる古写真／養蚕や信仰にかかわる資料／府中で出土した土器や石器など



「あるむぜお」は当館HPで閲覧できます！

No.1～最新号までをPDFで掲載しています。

※「あるむぜお」の定期購読をご希望の方は、1年分の送料400円（切手でも可）を添えて、ミュージアムショップ受付カウンターでお申込みください。

令和5年度
利用状況

区分		有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計
		一般	団体		
博物館観覧者 開館日数 279日	大人	159,400	1,793	49,139	210,332
	子供	22,873	5,917	50,108	78,898
	小計	182,273	7,710	99,247	289,230
上記のうち プラネタリウム観覧者 投映日数 135日	大人	13,159	753	3,714	17,626
	子供	7,307	3,139	3,948	14,394
	小計	20,466	3,892	7,662	32,020

※本館大規模改修工事のため、9月4日から本館（プラネタリウム含む）を休館し、3月4日からは全館休館しました。



新刊案内

＊『府中市郷土の森博物館紀要』37号 500円
学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・府中市と学校法人明星学苑－明星実務学校の府中町への立地 1923年（大正12）－ [高島秀樹]
- ・銘文のない武蔵型板碑（覚書き） [深澤靖幸]
- ・〈資料紹介〉府中市郷土の森博物館所蔵の「応永十九年」銘鰐口 [深澤靖幸]
- ・府中周辺における天保飢饉と救恤 [花木知子]
- ・〈資料紹介〉屋根裏のお札群（三）
－小野宮 内藤治右衛門家発見資料より－ [佐藤智敬]
- ・「府中町考古館」に関する一考察 [石澤茉莉子]

＊府中市郷土の森博物館ブックレット25 300円
『どんなもんだい？ 縄文時代』



縄文時代ってどんな時代？ 何がわかっていて、何がナゾ？
多摩地域ほかの遺跡でみつかった資料をもとに、当時のくらしを紹介したこども向けブックレットです。大人の方も、縄文時代に親しむきっかけとしてぜひご覧ください。

※新刊はミュージアムショップにて販売中です

フラネタリウムについて知ろう！



★★

国際プラネタリウム協会では 2023 年から 2025 年にかけて、近代プラネタリウム誕生 100 周年を祝う記念事業を行っていますので、本誌でも昨年度に引き続き 100 周年記念連載れんさいをお送りします！

さらに、この呼び名が生まれる前から、人は星々の動きを再現しようと様々な道具を生み出してきました。紀元前^{きげんぜん}にも、星や星座の位置を宇宙の外側から見て地球儀のように描いた「天球儀^{てんきゅうぎ}」がありました。紀元前2世紀には、正確な歯車を組み合わせ、太陽・月・惑星^{わくせい}の動きを表す装置「天文時計^{うんてんどうぎ}」が作られています。18世紀頃になると、惑星の精密な動きを視覚的に見せる模型、惑星運行^{わくせいうんてん}儀が作られました。

それから 40 年後の 1774 年 5 月 8 日未明、水星・金星・火星・木星・月が、東の空の近い位置に集まって見える、惑星会合がありました。当時でも天文学者は「珍しいものの、それぞれの惑星の位置関係による、単なる見かけ上の現象」と分かっていたましたが、世間では「この世が終わる」という荒唐無稽な噂が流れ、人々は恐れ慄きました。

当館のプラネタリウムも、皆さんが星や宇宙の美しさを楽しみながら、科学的知識にも親しんでもらえるように日々工夫くふうを続けています。アイジングーの精神は、今も私たちの中に脈々みやくみやくと受け継がれているのです。（相澤南美）



アイジングープラネタリウムを見上げた様子 ©Jean Housen